



田んぼ2030プロジェクト 田んぼだより

第9号 2025年3月28日発行

田んぼの生物・文化多様性2030(略称:田んぼ2030)ニューズレター
発行:NPO法人ラムサールネットワーク日本(ラムネット)水田部会
所在地:〒110-0016東京都台東区台東1-12-11青木ビル3F
TEL/FAX:03-3834-6566 電子メール:info@ramnet-j.org
ホームページ: <https://tambo10.org>



目次

- 日本の自然と有機農業 館野 廣幸(館野かえる農場) 1~2
- これまで、そしてこれから
~田んぼの生物・文化多様性2030プロジェクト~ 金井 裕(ラムネット) 共同代表) 2~3
- ふる里の田んぼ 仲地 大田 英二 3~4
- 水田部会からのお知らせ 4



日本の自然と有機農業

(1) 良好な自然環境を活かさなかった日本農業

日本はアジアモンスーン地域の湿潤温暖で四季のある豊かな自然環境に位置しています。(近年は亜熱帯化している!)この日本の自然は、豊かな植生を育み、多様な生物が住み、豊富な水と腐植に富んだ土壌を形成しています。こうした複雑で豊かな環境が日本農業の基盤でした。しかし、この自然環境を雑草の繁茂、病原菌の蔓延、害虫の多発という一面でのみ捉えた結果が農薬の多用であり、豊かな土壌への不信感が化学肥料への依存になったのです。農薬や化学肥料の使用は、例え少量であっても精密な土壌環境を破壊し、破壊された土壌は、さらなる農薬と化学肥料を要求します。日本の農業は、こうした麻薬的な状況に陥っていると言っても過言ではありません。そして生産者の多くは、農薬と化学肥料無しには農作物は育たないと信じてしまっています。

しかし、考えて見れば日本の3000年以上にわたるの農業の歴史の中で、農薬と化学肥料の使用期間はわずか100年です。そのたった100年で日本の農業と農地の生き物たちは壊滅の危機に陥っています。元来、日本人の生命を営々と支えてきた本来の農業は、農薬も化学肥料も無い「有機農業」でした。そしてその古来の「有機農業」を支えてきたのは、豊かな森林が生み出すミネラル豊富な腐植と土壌を覆う雑草に共生する微生物群でした。ところが、こうした雑草や虫、菌類を敵視する農薬と化学肥料によって現代の農業は強制的に生産量を増大させました。ところが、それは砂上の楼閣だったのです。しかし、まだ多くの人は言います、「昔の農業に戻るのか!」と。そうではありません、最新の自然科学的知見では、生物多様性のネットワークによる生産力と持続性は、農薬や化学肥料、遺伝子操作技術の非生産性をはるかに凌ぎます。その自然生態系ネットワークという大勢の生き物たちに支えられた有機農業(または自然農法)こそが農業の本質であり、人類生存の本道であると思います。



館野かえる農場 館野 廣幸



(2) 有機農業の真価は持続性にある

一般的に有機農業は「病虫害を防げない」「雑草だらけになる」「手間がかかる」などと言われます。ところが、農薬という武器を捨てて自然と向き合ってみると、田畑の生き物たちも心を開き、草たちの生える条件、虫たちの生き方、微生物の働きなどが分かってきます。農作物も自然の仕組みに沿って育てれば病気にはなりません。虫は人間が不自然な栽培を行うことで害虫化します。雑草の発芽は極めて繊細で、作物の生育期間だけ休眠してもらうことができます。また、雑草は自らの体が有機質肥料となって土を豊かにし、その根は大地を守る救世主です。微生物たちは空気中から窒素や炭素を取り込み、岩石中のミネラルを溶かして作物の生育を支える有機農業の主役です。こうした自然生態系の働きを人間が妨害しないようにすれば、余計な手間は要りません。収穫量は徐々に増えてきます。やがて自然が安定する持続的な収穫量に達すれば、それ以上は不要です。むしろ急激な収穫量の増大と過剰な資材の投入は、自然の生き物たちだけでなく農業そのものを足元から崩壊させているのです。

(3) 生き物たちが生み出した日本の文化



古来より日本の信仰や文化、芸術には、多くの生き物たちが表現されています。神社の狛犬(狼)や稲荷神社の狐、俳諧や和歌の動植物、民話や童謡の動物たちや虫を愛でる風習。おそらく世界に類を見ない数多くの動植物が日本文化の主役となっています。これらは、いかに豊かな自然生態系と人々の暮らしが密接に関わっていたかを証明しています。さらに、例えば「獅子舞」や「鹿踊り(ししおどり)」のように人間自らが動物となり、自然と一体になることを目指したような風習や民俗芸能も行われます。

そして、日本の文化が大地の土と密接に関わっていることは、多くの舞踊や芸能の所作に見られる「腰を落とす」姿勢の美的感覚にも見て取れます。西洋の舞踏に表現される跳躍的な美とは対照的に日本の沈静的な美は、あたかも大地と一体化している様です。これは、狩猟牧畜農業と水田稲作農業の違い

が表現されているのでしょう。さらに湿潤多雨の水田土壌は、日本人の歩行動作を「ナンバ歩き」（ナンバ＝軟場？）として、軟弱な大地で長時間疲労の少ない動作を生み出しました。こうした動きは、古武道の基本ともなっています。

生命を支える農業は、農産物の生産だけではなく、動植物や気候風土のもたらす文化や芸術も自然の恵みであるという共通理解を、かつては誰もが持っていたことが分かります。



カエルの働きで稲を栽培する

（４）有機農業の推進はすべての国民と生き物たちの協同作業

2021年に、我が国の農水省も有機農業を推進するという内容を「みどりの食料システム戦略」に発表しました。今まで農業と化学肥料の普及を推進してきた農水省が一転して有機農業の推進を掲げたのです。しかし農水省には有機農業の栽培技術がありません。国の農業予算のほぼ全ては慣行農業の技術開発に使われ、有機農業の研究機関さえありません。現代日本の有機農業技術は、そのほとんどが在野の有機農家たちが苦節の中で生み出したものです。日本の有機農業への転換において危惧されるのは、慣行栽培を推進してきた経済至上の思考を変えずに形式的な有機農業が行われようとしていること

です。それは自然の仕組みを理解することなくロボットやAIに頼るスマート農業の推進や、過度なビニール資材によって自然から分断隔離するような有機農業です。

そうではありません、有機農業は人と自然の協同作業であり、どちらかが欠けても成り立ちません。こうした有機農業の本質は、すでに先人たちも解き明かしています。田中正造（※１）は「真の文明八山を荒らす、川を荒らす、村を破らず、人を殺さざるべし」と記し、「ア、人心亡びて山川亡び、山川亡びて田園亡ぶの順序なり」と訴えました。また、宮沢賢治（※２）は「わたくしという現象」は「有機交流」であり「因果交流」にあるがゆえ、未来は人も自然も「世界がぜんたい幸福に」なり「生物となる方向にある」と予見しています。

有機農業は生産から消費まですべての国民が主体となって、すべての生命体の平和的な協同作業として行われるアナログ思考でなければ持続することはできません。日本だけではなく地球の未来は、自然界の生命原理に基づく有機交流世界の構築であると思います。

（※１）田中正造全集第13巻『日記』

（※２）『春と修羅』『農民芸術概論綱要』



自然の気候で栽培する有機米の育苗



これまで、そしてこれから

田んぼの生物・文化多様性 2030 プロジェクト

金井 裕（ラムサール・ネットワーク日本）

田んぼの生物・文化多様性2030プロジェクトは、2021年12月12日、小山市でキックオフ集会を開催し、水田目標2030を提示しました。これは、2020年まで続けていた田んぼの生物多様性向上10年プロジェクトを引き継ぎ、昆明・モントリオール生物多様性枠組目標（GBF）を達成し、田んぼの生物多様性の回復を図るためには、何が必要かを21の目標として示したものです。ここでは、田んぼの生きものたちが人々の生活とも密接に関わり、地域の文化の継承と創造に大きな役割を果たしていることを大きくとりあげました。キックオフ集会から3年が経過しました。この間に実施した活動を振り返り、2030年にむけての事業について考えて行きたいと思います。

実施した主要な活動は、田んぼの生きものたちの保全に関わる先進的な、あるいは地域で根付いた活動についての紹介と意

見交換です。①オンラインミニフォーラムは、ZOOM会議により、一般公開、②田んぼだよりは、登録いただいた方へは印刷物として配布するとともに田んぼ2030のWEBページにて公開しました。③ラムサール条約COP14では、展示とサイドイベント開催（環境省・農林水産省ほかと共催）、④地域交流会と⑤実績報告会では、実際に集まって意見を交換するとともに現場の視察も行いました。また、農家さんたちが取り組み易い試みとして、冬季に田んぼの水抜き栓を閉めることを呼びかけるため、宮城県農家の協力を得て効果を見る実験を開始しました。

この3年間で、田んぼと生きものをとりまく社会のさまざまな変化がありました。日本でのGBF達成に向けた環境省の会議では、私たちのプロジェクトで紹介して来た活動がとりあげられています。30by30への自然共生サイトでは、認定される水田が増えつつあります。一方で、温室効果ガス対策で中干期間の延長や

前倒しが推奨されるなど、気候変動対策が生物多様性へ負の影響を与えることが懸念される事態も起こっています。国内外の生物多様性保全の動きと各地での活動について情報交換・連携を行うことの重要性が増しています。

2030年にむけて活動を継続してゆくための資金については課題があります。これまでいただいている企業からの支援に加え、大きく頼ってきました地球環境基金の助成が今年度で終了します。そこでオンラインを活用してミニフォーラムを継続し、田んぼだよりは印刷・送付料を節約し、メールやWEBを活用して配布することを計画しています。

とは言え、なにより大切なことは現場でなにが起こっているか、そしてどのように対策を行って行くべきかをはっきりさせることです。

田んぼ2030プロジェクトに参加されているみなさんの活動の実際を発信してゆくことをこころがけて、2030年に向かいたいと思います。☆☆☆



ラムサール条約 COP14 サイドイベント

～田んぼ2030プロジェクト 2021年から2025年3月活動年表～

2021年	
12月12日	キックオフ集会(小山市)水田目標2030公表
2022年	
4月20日	「自然と共に－ネイチャーポジティブな農業への変革を目指して」
8月19日	第1回ミニフォーラム「田んぼと生物・文化多様性：なぜ生物多様性が文化の多様性を守るのか」
10月14日	『田んぼだより』第1号発行
10月14日	第2回ミニフォーラム「田んぼと生物・文化多様性：魚のゆりかご水田をはじめとする琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業」
11月5-13日	ラムサール条約COP14（スイス・ジュネーブ）サイドイベント「持続可能な湿地生態系としての水田と人々のための行動」、展示
11月23日	ラムサール条約COP14&ラムサール賞受賞報告会（東京）
12月7-17日	CBD COP15（カナダ・モントリオール）にて展示
2023年	
1月17日	『田んぼだより』第2号発行
1月27日	第3回ミニフォーラム「田んぼと生物・文化多様性：世界農業遺産「大崎耕土」の生物文化多様性を探る」
3月27日	『田んぼだより』第3号発行
7月26日	水田の水閘(水抜き栓)管理実験説明会(宮城県登米市)
9月22日	第4回ミニフォーラム「田んぼのOECM/自然共生サイトへの登録～その可能性と課題～」
10月12日	『田んぼだより』第4号発行

10月28日	地域交流会in徳島・小松島市
11月18・19日	第6回ICEBA運営協力（佐渡市）
12月15日	第5回ミニフォーラム「生物多様性を向上させる農法－大規模調査の成果報告と、農業の現場での生物多様性の向上を考える」
12月22・23日	水田の水閘(水抜き栓)管理実験(宮城県登米市)
12月26日	『田んぼだより』第5号発行
2024年	
2月28日	第6回ミニフォーラム「生物多様性を向上させる農法を学ぶ～不耕起 栽培～」
3月19日	『田んぼだより』第6号発行
6月27日	第7回ミニフォーラム「台湾の自然資源を活かした多様な水田農業～原住民、産、官、民などが協働した伝統的農法と生物多様性の維持、回復をめざす取り組み～」
8月9日	『田んぼだより』第7号発行
11月23・24日	田んぼの生物・文化多様性は守ることができるのか？～田んぼの生物・文化2030プロジェクト実績報告会～(上三川町)
12月20日	第8回ミニフォーラム「農地の生物多様性の回復を図る－農業基本計画改訂に向けた議論」
12月27日	『田んぼだより』第8号発行
2025年	
3月14日	第9回ミニフォーラム「田んぼの生物多様性を活かし、メタンの発生を抑制する～生物多様性保全策と気候変動対策の相乗効果を高め、課題の同時解決を目指す」
3月28日	『田んぼだより』第9号発行



久米島

ふる里の田んぼ 仲地 大田 英二

私は昭和24年に久米島の西側に位置する仲地集落で生まれました。かつて島には多くの棚田があり、緑豊かな田園風景が広がっていました。しかし昭和40年頃大旱魃で被害、その頃サトウキビ増産農政もあって、稲作が激減しました。これに追い打ちをかけ、日本復帰後の土地改良事業



による区画整理で田は畑に転換、跡形も無くなりました。そんな時代推移の中、我が仲地集落の南西部一帯の数千坪の棚田は、地元有志の強い要望によって保存されました。そこに実家の田がありますが、現在棚田の大部分が耕作放棄され、数百坪が田んぼとして続けられているだけです。

かつての棚田にはトンボ・バッタが飛び交い、ヌマガエル、ドジョ

ウ、鮒、蟹、田螺がおり、鴨、鷺、バン類が数多く飛来、蛇類も見ました。米は二期作、棚田には通年水が張られ、肥料には家畜の肥、稲わら、茅の堆肥、桑、ハマボウの枝葉の緑肥を施し、それを裸足で踏み込む有機農業でした。入手の容易な蘇鉄の葉はよく利用しましたが、要領が悪いとトゲが足に刺さり痛かったです。苗づくり、田起こしは大人の仕事、田植え、除草、稲刈りは子どもが手伝い、脱穀は足踏み機を使っていました。籾は唐箕でより分けて天日干しし、ドラム缶で保管しました。とにかく、稲作は手作業により家族総出で行いましたが、農繁期皆揃って原で食べる昼飯が実においしかったです。

そんな子ども時代の思い出、代々自給自足してきた農業生活のことを思うと、目の前の棚田の荒廃は見るに忍びなく、二十年前に帰郷後、一度は実家の田の再生に取り組みました。しかし、稲作は人力頼み、中腰での作業が多く、野菜、バナナづくりに精を出していたこともあり、結局頓挫しました。それでも田畑を残してくれた祖父、父への感謝を込めて、棚田を復元したい望



放置棚田

みは持ち続けてきました。そんな中、二年前に米作りをしたいという若い移住者二人と知り合い、彼らに再生を託すことにしました。私は早速三枚の田を手始めに、草刈り機で密生するハイキビを刈り、枯らせて焼却し、下準備を終えました。その後二人が田鍬で耕し、昨年一期目の米を収穫しています。現在更に一人、希望者が現れ、新たに四枚の耕作を終えて田植えを待つところです。

丁度そんな頃に、ラムサール・ネットワーク日本の方々を紹介され、何度も田んぼに来ていただき、色々と話を聞く機会に恵まれました。その交流の中で棚田の復元、湿地の保全の意義を改めて感じています。

今、田んぼには有害なジャンボタニシが大量発生、かつての豊かな生態系は見られませんが、タウナギが生息、水路にシジミもいます。また数種の野鳥が数羽ながらも朝夕に來ています。一枚一枚は数十坪の田んぼながら、更に担い手が増え、昔のようなふる里の風景へ一歩でも回帰できればと思っています。



再生田んぼ

<水田部会からのお知らせ>

●伊豆沼農産の「ふゆみずたんぼ」が自然共生サイトに認定！

本プロジェクトに協力いただいている伊豆沼農産の「ふゆみずたんぼ」が自然共生サイトに認定されました。お祝い申し上げます。



●田んぼだよりは次号からPDF版になります。



田んぼの生物・文化多様性2030プロジェクト（2021～2030）は地球環境基金の助成を受けて活動を実施してきました。25年度はこの助成がなくなり、活動資金は企業からの支援だけとなります。第9号まではパソコンを使わない方々とも情報交換が必要だという理由で、印刷版の田んぼだよりを作成し郵送してきましたが、第10号からは印刷・発送が実施できなくなりました。今後はPDF版を作成し、メールマガジン、メーリングリスト、HPへの掲載等を予定しています。引き続きお読みいただければ幸いです。



ご意見等はこれまで通り jimu@tambo10.org までメールをくださるようお願い致します。



食卓を笑顔に、地域を豊かに。

田んぼ 2030 プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。
このニュースレターは、2024 年度 地球環境基金の助成を受けて作成しました。



連絡先/事務局

ラムサール・ネットワーク日本
jimu@tambo10.org
TEL/FAX:03-3834-6566